
転校生は.....！？

mottsu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転校生は……………！？

【Nコード】

N1735X

【作者名】

mottsu

【あらすじ】

彼氏と別れてぼろぼろなちさとの前に現れたのは…なんとちさとが大好きなテニスの王子様のキャラクター、不二周助にそっくりな人だった……………！？

主人公紹介

主人公

名前：西島 ちさと

性別：女

年齢：17歳（高3）

身長：160cm

S高校に通う極々普通の女の子。

成績も運動神経も人並み。

人当たりが良くて明るい。

顔が可愛くて女子からも男子からも好かれている。

男の子からの人気も高いが鈍感な為全く気付いていない（笑）

そんな性格からか学校の男子からは告白を今まで一度もされたことがない。

告白してもスルーされそうという理由だとか：笑

テニスの王子様が大好き！

中でも不二、越前、菊丸が好き。

つい最近まで付き合っていた彼氏が静岡に居る。

出逢い（前書き）

語りは主人公 s s i d e 以外にも沢山の語りがあります（< | >）
わかりにくかったらすみません（< | >）

駄文ですが読んでいただけると嬉しいです（o ^ ^ o）

出逢い

ある日僕は知り合いに会うために静岡に行った。

夜になって東京行の新幹線を待っていると一人の女の子が泣いていた……

静かに……声を出さずに涙だけを流して……

いつもならそつとしておいただろう……

きつと相手もその方がいいと思うから……

でもその日は違った……体が勝手に彼女の方へと歩いていた。

「どうしたの？」

優しく聞いてみた。

すると彼女はゆっくりと僕を見た。

「あっ……ごっごめんなさい……私……」

彼女は恥ずかしそうに涙を拭ってそう言った。

僕にはそれがとても可愛い仕草に感じられた。

「大丈夫だよ。よかつたら話だけでも聞くよ？そうしたら楽になるかもしれないでしょ？」

笑顔でそう聞くと彼女はゆっくりと話し始めた。

「東京から……突然行って……驚かそうと思って……彼氏に会いに静岡まで来ました……でも……」

そこまで言うともまた涙を流した。

僕がハンカチを渡すとお礼を言いながら彼女は涙を拭った。

「彼氏が……違う女の子と……楽しそうに歩いてたんです……と……友達かなって思って……声をかけたら……明らかに焦ってるのがわかりました……そしたら……とっ隣に居た女の子が……『この人だあれ？』……って……彼の腕に自分の腕を絡ませながら……彼に聞いてたんです……」

「……」

そこまで言い終えるとハンカチを顔から離した。

僕は彼女の目が腫れてても綺麗だと思った。

「その女の子に関係は聞いたの？」

僕はゆっくりと優しい口調で聞いた。

「私…思い切って…『彼女？』って女の子の方に聞いてみたんです…
するとその子は照れながら…『1ヶ月前に付き合い始めたんです』って…笑顔で言っていました…その子は可愛くて…ああこんな子が好きだったんだって…私は…愛されてなかったんだって…でも…そんな顔は見せずに…『可愛いね！おめでとう！お似合いだね！』って…笑って…思ってもないのに…そんなことを言っちゃいました…そんな自分が悲しくて…笑っちゃいますよね…」

「笑わないよ？辛かったね…よく頑張ったね…」

僕は命一杯の優しさでそう言った。

守ってあげたい…心からそう思った。

「彼から連絡は来たの？」

「はい…さつき電話で『お前の方が好きだから…あの子と別れるから…だから怒らないで』って…呆れちゃいますよね…甘えられて満更でもない顔してたのに…それで…『ばいばい』って…一言言って切っちゃったんです…」

「間違っていないと思うよ？彼のこと…本当に好きだったんだね。今は辛くても、いつかいい思い出になってまた笑って彼に会える日が来るよ。」

僕は微笑ってそう言った。

すると彼女は

「ありがとうございます。」
と言って少し笑った。

その笑顔がとても可愛くて……また見たいって思ったんだ……

別れ際に彼女の鞆に『CHISATO』と書いたキーホルダーが付いているのを見付けた。

「今日は話を聞いてくれてありがとうございます。楽になりました！」

彼女は微笑んだ。

「いいよ。また会えたらいいね。じゃあね……『ちさと』ちゃん」
彼女は驚いていたが笑って「さようなら。」と言ってくれた。

それが彼女との出逢いだった……

転校生（前書き）

今回は主人公sideです（o^ ^o）

転校生

私はいつもの様に学校へ向かっていた。

学校について自転車を置き、スリッパに履き替えていると聞き慣れた声が聞こえた。

「おはよう、ちさっちゃん！」

ち「おはよう、りなちゃん！」

りなちゃんだった。

1、2年は同じクラスで3年になって離れてからも仲良くしている。

り「今日ちさっちゃんのクラスに転校生来るって先生が話してるの聞いたよ！」

ち「そうなんだ〜！女の子かなあ？男の子かなあ？」

り「わかんないけどこの時期に転校生なんて珍しいね。」

私達は自分達の教室まで歩きながらいろいろ転校生について話していた。

私もりなちゃんも国際教養科でクラスは隣。

3年になって普通科と棟が変わった。

教室に着いて私達は別れて自分の教室に入った。

ち「おはよう。」

「「「おはよう。」「「「

キーンコーンカーンコーン……

チャイムが鳴って皆席に着くと先生が入って来た。

転校生の噂はみんな知っていて、みんながワクワクしていた。

私は考え事をしていたため、ぼーっと窓の外を眺めていた。

再会（前書き）

転校生sideです（o^ ^o）

再会

僕達は今日から新しい学校に行く。
普通科ではなく興味があつた国際教養科にした。

「クスツ……どんなクラスか楽しみだね……」

「そうだにゃ〜可愛い子いるかにゃ〜！」

職員室に連れて行かれるかと思えばなぜか体育教官室……

担任の先生が体育の先生だからここで待つててと言われて体育教官室で待っていると……

……つえ！？

頭が光っている先生が……笑いそうになるのを僕は得意のポーカーフェイスで隠す。

隣を見ると英二が必死にこらえているのがわかった。

そんなに年はいつてないな……50ぐらいかななどと考えていると先生に話しかけられた。

先「おはよう。2人共俺のクラスだからよろしく。」

「はじめまして、不二周助です。これからよろしく願います。」

英「はじめまして、菊丸英二です。よろしく願いますにゃっ」

先（………にゃ？）

先生に連れられて教室の前に来た。

先生は先に教室に入り、廊下には僕と英二の2人だけになった。

英「緊張するにゃ〜」

周「クスツ…そうだね。」

先「入って来い。」

先生に呼ばれて僕らは教室に入った。
教室がざわついた。

転校生が来たんだから当たり前か。

僕は辺りを見回す……あっ……！

そこにはぼーっと窓の外を眺めている女の子がいた……あれは間違いなく……ちさとちゃんだ……！

驚いたがとりあえず自己紹介を始めた。

周「不二周助です。よろしくね。」

英「菊丸英二だにゃ！よろしくねん！」

先「お前らをどこの席にするかなあ……」

先生はクラスを見回した。

ちさとちゃんがこつちを見て僕と目があつた。

ち「……………っあ！」

その途端びっくりして声を上げた。

周「クスッ……ちさとちゃん憶えてくれてたんだね。」

僕がボソツと呟くと先生が席を決めたようだった。

先「西島の知り合いなら西島の隣にするか！川端っ代わつてくれるか？西島！西島ちさと！ぼーっとするな！不二の席はお前の隣だ！」

川端という男の子は空いている机に移動して行った。

先「富山！お前も移動しろ。」

富山という女の子も移動した。

先「西島の隣が不二、その前が菊丸。」

「はい。」

僕は席に着いた。

僕はメモ帳をちぎりそこにメッセージを書いてちさとちゃんに渡した。

会話(前書き)

主人公side

会話

私は目を疑った。

なんで彼がここにいるのか…

しかも今は高校3年の秋。

それに………不二周助！？菊丸英二！？テニプリじゃん！！

しかもそっくり…性格、口調まで…

そつえば前に会った時は名前聞かなかったな…お礼言わなきゃ！

すごく優しい人だよ…

私の頭がフル回転していると不二くんが紙を渡してきた。

僕は不二周助

周助って呼んでね。

僕もちさとって呼んでもいいかな？

君が僕のこと憶えてくれてたなんて嬉しいよ。

私は自分の顔がだんだん熱くなるのを感じた。

それを隠しながら私は返事を書いて彼に渡した。

もちろんいいよ！

私も憶えてくれてるなんて思ってたから嬉しい！

よろしくね！周助！

それを受け取った彼はとても優しく微笑んでくれた。

HRが終わると周助が話しかけてきた。

周「ねえちさと、僕まだ教科書ないんだ。もしよかったら一緒に見せてくれないかな？」

ち「もちろん！あつ、でも菊丸くんはどうするの？周助は隣だから見せてあげられるけど……」

英「俺は先生に借りるにゃ〜！1冊なら借りれるからねん！」

ち「それなら大丈夫だね！」

英「うん！それよりさあ〜2人って知り合いなの？」

周「クスツ……まあね。ね？ちさと。」

そう言つて私を覗き込む周助が凄く爽やかでつい見とれてしまった。

ち「……うん。」

照れて紅くなっているだろう自分の顔が目立たないように軽く前髪を触りながら答える。

2人とも自然にしているから気付かれていないのだろう。

ほっとしたところである疑問が浮かんだ。

……2人は一体どこの高校から転校してきたのだろうか……

私は思い切つて聞いてみた。

ち「2人共どこから来たの？」

周「青春学園だよ。僕ら同じ学校から来たんだ。」

英「青学でテニスやってたんだよ〜！中学の時は全国制覇したにゃ〜！」

ち「……青学かあ、すごいね！でもどうしてこの時期に転校なの？

しかもそんなに凄い所なら尚更不思議！」

青学って諸にテニプリだつっ！

しかもそんな学校あつたっけ……？

周「クスツ…僕らはもう引退してるからね。こっちに来たのは僕らの家の都合だよ。丁度同じ時期にこの辺に引越すことになってね、どうせなら同じ高校に行けばいいって母さん達が。」
英「誰かと一緒の方が安心だしねン！」

ち「なるほど。わからないことがあったら遠慮なく聞いてね。あつ周助！」

周「ん？なに？」

ち「この前はありがとね！ちゃんとお礼できてなかったからさ。なんかあったら言って！お詫びになんでもするから！」

周「クスツ…いえいえ。なんでもしてくれるのかあ…クスクスツ…
…そうだね、考えておくよ。」

周助は微笑みながら私に言った。

その顔はやっぱり素敵で…でもなぜか今の微笑みは少し悪戯っぽい
笑いだっただのは気のせいだったのだろうか……

黒 (前書き)

今回は第三者目線です。

黒

授業はもちろん集中できる訳もなく気が付くと終礼が終わっていた。

放課後になるとクラスのみんなが不二と菊丸の周りに集まっていた。そんなみんなに2人は戸惑いながらも笑顔で応えていた。

ちさとは入る隙もなく、帰ろうと鞆を持って教室を出ようとすると後ろから呼び止められた。

クラスメイト「ちさと！不二さんと知り合いなんだ？」

みんなの視線がちさとへと集中する。

ち「まあね……」

ちさとは気まずそうに答える。

ち（みんなの視線がこわい……！）

周「僕もうそろそろ帰るね。ちさとも帰るんでしょ？」

ち「うん。」

周「なら一緒に帰ろうよ。ちさとと同じ町だってさっき先生に聞いたんだ。」

ち「そうなんだ！じゃあ帰ろっか！」

そう言くと2人は教室を出た。

ち「周助、ありがとう。」

不二の何気ない言葉はちさとを救っていた。

もちろんちさとが困っていることに気付いて声をかけてくれたということもわかっていた。

ちさとはそれがとても嬉しかった。

周「いいよ。」

微笑みながら優しく言った。

英「あの〜……」

ち・周「？」

英「いい雰囲気のところ悪いんだけど……俺は？ほっとかされると寂しいにゃ……」

菊丸は仲良く並んで歩く2人に後ろから声をかけた。

ち「……笑」

周「クスクスツ……」

その時の菊丸がなんだか捨て猫の様でつい2人は笑ってしまった。

英「……なんだよ〜2人して笑うにやんて失礼だにやっ！」

菊丸が拗ねて言うのと2人は声を揃えて言った。

ち・周「……だって英二（菊丸くん）が本当に寂しそいな顔してるから……」

周「クスツ……大丈夫。忘れてないよ。英二も途中まで一緒に帰ろうか？」

英「いいの？お邪魔じゃにゃい？」

ち「何言ってるの？邪魔な訳ないじゃん！」

ちさとが笑顔で言うと菊丸が満面の笑みで抱きついてきた。

ち「えっ！？ちよっ……」

英「ねえ！ちさとちゃん！下の名前で呼んで欲しいにゃ〜！」

ち「わかった。英二くん？」

英「それでいいにやっ！」

菊丸は満足そうに頷く。

…が、ちさとから離れる気配はない。

その時、菊丸は後ろから嫌な気配を感じた。

振り返るとそこには笑顔の不二がいた。

周「クスツ…ねえ英二…いつまでそうしてるの？（黒笑）」

菊丸はだんだん自分の体温が下がるのがわかった。

英「…ごつごめん！ちさとちゃん！俺…嬉しくてつい…」

ち「別にいいよ。」

ちさとは笑いながらそう答え、小声で聞いた。

ち「周助、なんか黒くない？」

英「黒不二だにや…気を付けないと恐いにや…」

ち「そ…そうなんだ…」

この時、ちさとは不二を怒らせまいと心に誓った。

真実

不「ねえちさと、漫画とか読む？」

ち「片寄りはあるけど読むよ。」

菊「じゃあさじゃあさ……… テニプリって……… 知ってるかにゃ？」

ち「……… 私が一番好きな漫画だよ………！」

不「ならもう気付いてるよね？僕らのこと………！」

ち「うん……… あの……… こんなこと聞いてもいいかわかんないんだけど

……… 二人はどこから来たの………？」

不「ちさとには話そうってさっき英二と話してたんだ。僕らね………

昔はこっちの世界に居たんだよ。」

ち「えっ………！」

菊「不二の言ってることは本当だにゃ。俺らは最近こっちに戻された。」

不「僕らが小学校に入る前にね、いきなり母さん達と一緒にテニプリの世界に連れて行かれたんだ……… 最初はわけがわからなかった。

でも向こうの生活に慣れてくると違和感なんてなくなって……… こっちの世界のことは忘れずにいようって決めてた……… いつか戻りたい

って思ってた……… あっちの生活も楽しかったけど……… それでも戻りたいって願いながら生活を送ってたんだ。」

ち「……… うん。」

不「そしたらね、不思議なことだけど……… 母さんが引越りするよって言うて来たんだ。英二の家と一緒に。」

菊「初めは驚いたけど、元の世界に戻るんだって言われて嬉しかった。みんなそれぞれこっちの世界に戻って行ったにゃ。住む場所は

バラバラだけど……… 今でもみんなと連絡を取り合って……… 大切な仲間が増えたんだっ！」

ち「（じゃあ……… もしかして………！）」

ちさととはハッと何かを思い付いたような顔をした。

それに気が付いた不二はちさとに声をかけた。

不「ちさと？どうしたの？」

ち「なっなんでもないよ！」

ちさととは驚いてとりあえず誤魔化した。

ち「でも……二人共、戻って来れてよかったね！こうして出会えたのも必然だったのかな……！」

ちさとがにこつとそう言うと不二と菊丸の顔が赤くなった。

そんな二人にちさととは気付くはずもなく三人は仲良く帰って行った。

不「ここが僕んちだよ。」

菊「んでこつちが俺んち！」

そう言つて菊丸は不二の家の隣の家を指差した。

ち「えっっ！うそ………」

ちさととは固まった。

不「クスッ……どうしたの？（笑）」

菊「なんかあつたかにな？」

依然ちさととは固まったまま………それもそのはず………不二の家は

………ちさとの家の隣だった………

それを二人に伝えると

菊「え〜！やった〜！なんか運命感じるね！」

不「クスッ……僕は知ってたけどね（笑）」

不二はニコニコとそう言つてちさとの頭を撫でた。

ち「え〜！周助知ってたの！？なんで言ってくれなかったの？」

不「クスッ……驚かせたかつたんだよ………（笑）」

ち「もおゝ意地悪うゝ」

菊「俺にぐらい教えてくれたってよかったじゃん！」
不「クスツ…ごめんごめん（笑）じゃあ帰ろうか。」

ち「そうだね。じゃあ二人とも、また明日ね！」

不「またね。」

菊「バイバイ！」

三人は別れてそれぞれの家に入って行った。

終業式（前書き）

前半主人公サイド、後半第三者サイドです。

またまた更新遅れて申し訳ありません m ((m

終業式

周助と英二くんが転校して来てからもう2ヶ月が経ち、季節もすっかり冬……今日は終業式だった。私はいつも通り周助と英二くんと一緒に学校から帰った。

ち「校長先生の話長かったねー」

菊「俺途中で寝そうだったにやっ」

不「クスツ…英二らしいね。」

ち「本当〜！」

私達は他愛もない話をして笑いながら自転車をこいでいるといつの間にか家まで着いていた。

ち「そうだった今日家来ない？昨日クッキー焼いたんだ！」

不「嬉しいな、行かせてもらうよ。」

菊「俺も俺もっ！」

二人がこんなにも喜んでくれるなんて思ってたな……（笑）
よかった！

ち「ただいま〜」

不・菊「お邪魔します（にや）。」

ち「今両親出かけてるから気を遣わなくていいからね。クッキー持ってくるから先に部屋行ってて。」

不「わかった。」

菊「ほーい！」

菊「不二不二い〜！クリスマス空いてる？」

不「空いてるけどどうしたの？」

菊「クリスマスは不二とちさとちゃんとパーティーしたいと思って死守したんだにやっ！」

不「クスツ…ああ、僕も同じ考えだったよ。」

二人は今日沢山の女の子達に囲まれていた。

その理由はただ一つ…明後日はクリスマスイブ…そしてその次の日は待ちに待ったクリスマス！

みんな不二と菊丸とクリスマススを共に過ごすために約束を取り付けようと必死だったのだ。

それを二人は全て断っていて、クリスマスは自由。

菊「不二も今日大変だったにやあ…なんて断ったの？」

不「家族と過ごすからってね。イブは前の学校の友達とパーティーするからごめんねって丁重にお断りしたよ（ニコツ）」

菊「（……………黒いにや…絶対不機嫌だ…………）不二が言うと嘘だと思っ人居ないもんね。」

不「クスツ…英二も大変だったでしょ？」

菊「俺は用事あるからとだけ言っと言ったよん！」

不「クスツ…英二らしいね。」

菊「でさでさっ！クリスマス、ちさとちゃん空いてるかにや？ちさとちゃん来たら誘おうなっ！」

不「クスツ…空いてるといいね。」

ち「お待たせ〜お口に合うといいんだけど…」

菊「わ〜！美味そう！いったただつきま〜すっ！」
不「ありがとうございます。いただきます。」

ち「どうかな？」

菊「美味い！」

不「美味しいよ。上手だね。」

ち「よかつた〜喜んでもらえると作り甲斐があるよ。」

菊「ねえクリスマス空いてる？」

ち「空いてるけど……？」

不「よかつた。三人でパーティーしない？」

ち「するする！」

菊「場所どうする？」

不「うちに来る？丁度裕太もイブにこつちの世界に帰って来るらしいし一緒に混ぜてあげてくれないかな？」

ち「裕太君帰って来るの？会ってみたい！」

菊「クリスマスなんて裕太君のためにあるようなもんだかね！笑」

不「ほんとお辛党にすべく英才教育を施したのにどうして甘党なのかな？（黒笑）」

ち・菊「（……………立派な弟苛めだ……………裕太君……………可哀想に……………）」

菊「もうそろそろ帰るにやっちさとちゃん、ごちそうさま！じゃあまたクリスマスにね〜！」

ち「バイバイ！」

不「ねえちさと、イブは暇？」ち「夕方ケーキ焼くけどそれまでは暇だよ。」

不「なら一緒に出かけない？」

ち「なら英二君も……………」

不「……二人がいいんだけど……ダメかな……？」

ち「？いいよ。」

不「じゃあ明後日の朝迎えに行くよ。」

ち「わかった。」

不「じゃあ今日はどうもごちそうさま。お邪魔しました。」

ち「またね！」

お昼ご飯(前書き)

更新遅れてすみませんでした(＜|＞)

入試やらなんやらで書けませんで……(ノ<>ノ)

無事大学も決まりましたと書けた次第です……

これからも頑張っていく予定なのでよろしく願いします(、
、
)

お昼ご飯

イブ……………

不「おはよう」

ち「おはよー」

二人は近くに買い物をしに出かけた。

お昼……………

不「ご飯どうする？」

ち「なんでもいいよ。何か食べたいものある？」

不「特には……………じゃああそこでいいかな？」

そう言つて不二が指差したのは小さな洋食屋さん。

雰囲気も良さそうな店でちさとも同意しそこに決まった。

二人はゆっくりとご飯を食べていた。

一見微笑ましい風景……………

ち「……………周助……………」

不「ん？どうかした？」

ち「……………それ……………食べるの？」

不「？そうだけど？」

不二はちさとが何を言っているのかわかっていない……………が
ち「……………味あるの?!」

状況を説明しよう。

ちさとはオムライスを注文、不二はハンバーグを注文……とここまではいたって普通。

だが問題はここから……ちさとは普通に食べ始めていた。一方その頃の不二はと言うと……

シヤカツシヤカツ……

ピチャピチャツ……

さて……もうおわかりいただけただろうか………笑
ガシツ

ち「………お店の人もみんな困ってるから………ね？」

ちさとは不二の手首を掴んで言った。

不「？………わかったよ。」

シヤカツシヤカツは七味、ピチャピチャツはタバスコ。

ち・店員『………』

ち「す………すみません！」

ちさとは店員に謝る。

ち「周助………周助が辛いのが好きなのはわかってる………わかってるんだけど………お店の人に謝る？あと………ハンバーグにも………ね？」

不「ごめんなさい………」

店員「い………いえ、一応お召し上がり方はお客様の自由ですので………」

………」

ち・不「ごちそうさまでした。」

途中にあんなことがありつつも昼食を終えた。

帰り道……

不「あっそうだ今日うちでケーキ作ったら？夜うちでちょっとしたパーティーするしちさと参加して欲しいな。」

ち「じゃあお邪魔しようかな。」

不「ただいま。」

ち「お邪魔します。」

由「おかえりなさい。あらちさとちゃんいらっしやいケーキうちで作るんでしょ？なら一緒に作りましょ！」

ち「はい！」

由「あっそうそう、周助、裕太がもうすぐ帰って来る頃だと思っから。」

周「わかった。」

ちさとと由美子はケーキを作りに行った。

お昼ご飯（後書き）

さて……次は裕太君出します！

ケーキ作り（前書き）

またまた更新遅れてすみません（<―>）

ケーキ作り

ちさとside

由「なんか妹が出来たみたいで嬉しいわ！いつそのままうちの子になる!？」

ち「アハハ（笑）」

由「まあ将来でもいいけどね…ボソッ」

ち「?何か言いましたか？」

由「何も無いわ 気にしないで？」

ガヤガヤ……………

ん?なんかリビングが騒がしくなってきたな…なんかあるのかな?

ち「リビング、今日何かあるんですか？」

由「ああ、今日は裕太も帰って来るしお友達も呼んでパーティーするのよ。みんな集まって来たのね。会うのも久しぶりだし盛り上がってるんじゃないかしら？」

ああそついや周助が言ってたな『ちよつとしたパーティーする』って…

ち「でもせつかくみんな帰って来て会えたのに私なんか居てお邪

魔なんじゃ……………」

由「あらっそんなこと気にしない！周助が誘ったのよ？歓迎してくれるわ それに初めてなの。」

初めて？何がだろっ？

ち「何が初めてなんですか？」

由「周助ね、いつもニコニコしてるでしょ？」

ち「そうですねえ。」

由「だから姉の私が言うのも変だけど女の子からも男の子からも人氣あるじゃない？」

ち「アハハ（笑）終業式の時も女の子に囲まれてました（笑）」

由「なのにな…家に連れて来る子は皆男の子で、今まで女の子を家に連れて来たことなかったのよ…」

ち「えっそうなんですか？」

正直私は驚いた。

でもよく考えれば周助が他の女の子と特別親しくしてるところなんて見たことないな……

由「だから初めてちさとちゃんを家に連れて来た時はお母さんも私も本当にびっくりしたわ！でもね、周助が家にちさとちゃんを連れて来たってことは相当心を許してるんじゃないかしら。」

ち「そうだと嬉しいです！」

由「姉の私が言うんだもの、間違いないわ！」

チンツ

由美子さんと話している間にケーキが焼けた。

ガチャツ

「姉貴ただいま。おお！いい匂いすると思ったたらケーキだっ」

あつ裕太だ！……とりあえず大人しくしてよ…

由「おかえりなさい。後でリビングに持ってくわ。先に手洗って周助に顔見せてきなさい、あの子裕太に会いたがってたのよ？」

裕「おお！……ん？そこでデコレーションしてんの誰？」

見つけた。

由「あら忘れたの！？あなたのお姉さんよ！？」

えっ！？

裕「……………はあ！？」

周「クスツ…姉さん、裕太が混乱してるから（笑）からかわないであげてよ（笑）」

周助いつからいたの!?

由「あらっいいいじゃないの　だって裕太ってからかい甲斐があつて
可愛いんだもの」

……………裕太可哀想

周「ちさと、ちょっと。」

周助が私に手招きしたのでそっちに行つた。
ん?背中に温もりが……………横で呼吸音が……………って呼吸音……………!?

周「僕の彼女の西島ちさと」

……………えっ!?

今周助なんて言った!?

菊「え〜っ二人って付き合つてたの!?!初耳だにや〜!」

裕

うわあ……………裕太驚いて動けてないじゃん。

まあ私も体が硬直して動かないけど……………

周「……………なんだ、反応なしなんてつまんないなあ……………嘘だよ。友達
のちさとだよ。」

えっそんな理由!?

あっやっつと離れてくれた……………心臓に悪いな……………

裕「お……俺裕太です。よろしく願いします。」

……

周「ちさとも……いつまで固まってるの？クスッ」

ち「ハッ私西島ちさと！よろしくね、裕太くん」

菊「なーんだ嘘か。びっくりしたあ！」

周「ふふふ……あっちさと、ケーキできた？」

ち「うん！できたよ！」

周「なら、そろそろ行くよ？」

由「ケーキはご飯の後に持って行ってあげるから楽しんできなさい。」

周「ありがとう、姉さん。」

ち「ありがとうございます！」

そして私たちは周助の友達のリビングへと移動した。

ケーキ作り（後書き）

とうとう出しました、裕太！

甘党だからという理由でケーキ作りの時に出したかったんです！

そして由美子姉と周助に裕太をからかわせたかったんです！笑

そしてそして！

ヒロインも捲き込んで英二に一時的に勘違いさせたかった！笑（
なにそれ？）

今回そんな私の夢を叶えてみました！笑

これから他のキャラも出てくる予定です！

お楽しみに（´、`）ノ

挨拶（前書き）

あけましておめでとぅございます（o ^ ^ o）

去年に引き続き毎回更新遅れて本当にすみません（< | >）

こんな小説でも読んで下さっている皆様、本当に感謝しきれません
…………… p（、、q）

こんな私ですが今年もどうぞよろしくお願いします！

ではでは今夜も「そろそろ行くよ」

わかっていただけますか？笑

挨拶

ち「…周助、私も心臓止まるかと思ったよ……………」

周「クスツ…だって裕太とちさとが可愛くて…つい…ね？」

不二は悪びれる様子もなく笑顔で答えた。

そしてこれからのことについて説明を始めた。

周「今日来るのはちさとが知ってるメンバーだよ。青学のR陣、みんなにはちさとが僕らのことを知ってるって言ってるから気を遣わないでいいからね？」

不二は優しく微笑みながらちさと頭の髪をくしゃっと撫でるとリビングの戸を開けた。

「不二、久しぶりだな。」

「久しぶり。元気かい？」

「不二、久しぶりだね。」

「不二と菊丸がもう友達を作っている確率90%。」

「不二先輩、お久しぶりっス！」

「お久しぶりです…フシユウ」

「チイス…」

周「クスツ…みんな久しぶり。相変わらずだね（笑）」

大「あつ…不二、後ろに居るのが前に言ってた友達かい？」

周「後ろ？ああ、ちさと、何隠れてるの？出てきなよ、みんなには全部知ってる友達が居るって紹介してあるから（ニコツ）」

不二の口調が優しく、さらに珍しく裏のなさそうな微笑みを浮かべ

ていることにそこにいた全員が驚いた。

ち「……に……西島ちさとです！……よろしくお願いします！」
R「よろしく（ね／お願いします／っス）」
ちさとが微笑んだ時みんな顔が赤くなった。

……ただ一人を除いて。

そしてこの時誰も気付くことはなかった。

一人だけちさとに挨拶をしていないメンバーが居たことに……

挨拶（後書き）

やっと出せました！青学R陣！

なんか微妙な所で終わってすみません（<―>）

次回もお楽しみに（、（ノ

違和感（前書き）

第三者*side*からの不*side*です。
不*side*というよりは不*side*の考えです。

違和感

ケーキ持ってくると言ってちさとがリビングを出て行った後、不二
は部屋を見渡していた。

桃「どうしたんスか？不二先輩。」

周「確かちさと合わせて10人居たよね…？」

桃「そうツスよ。それがどうかしました？」

周「いや…彼女がさつき出て行ったのは知ってるけど……二人足り
ないんだ…」

不二はそう言っただけでまた辺りを見回す。

不二にそう言われ、桃城もメンバーを数え始めた。

桃「いち…に…あつ本当ツスね！七人しか居ないツス…！」

周「誰か出て行ったかなあ……………？」

桃「まあそのうち帰って来ますよ！」

桃城は大して気にしていないように軽く答えた。
普通の考えだが不二は何か引つかかっていた。
不二はモヤモヤしながらそうだねと返事をした。

不二side

ちさとをみんなに紹介した時何かが引つかかっていた。

そして今も…

彼女が微笑んだ時みんなが赤面したから………？
いや…違う、確かにその時は嫌だった。

でもそれと同時に違う理由でモヤモヤした…

それにだ…みんなが彼女に挨拶した時…

あの時だって何かが気になる…

…思い出せ自分…考えるんだ…

~~~~~

「よろしく(ね/お願いします/っス)！」

この時だ…あれまた人数が足りない……？

それにあの時も……？

みんな赤面したから……だから僕は勘違いしていたんだ…

あの時顔を赤くしたのは全員じゃなかったんだ…

でも誰が足りてないかがわからない…

それに何故足りていないのかも…

不二はモヤモヤしながらそうだねと返事をした。

\*\*\*\*\*

不二side

ちさとをみんなに紹介した時何かが引つかかっていた。  
そして今も…

彼女が微笑んだ時みんなが赤面したから……？

いや…違う、確かにその時は嫌だった。

でもそれと同時に違う理由でモヤモヤした…  
それにだ…みんなが彼女に挨拶した時…  
あの時だって何かが気になる…  
…思い出せ自分…考えるんだ…

~~~~~

「よろしく(ね/お願いします/っス)！」

この時だ…あれまた人数が足りない…？
それにあの時も…？

みんな赤面したから…だから僕は勘違いしていたんだ…
あの時顔を赤くしたのは全員じゃなかったんだ…
でも誰が足りてないかがわからない…
それに何故足りていないのかも…

僕以外に違和感を覚えた人は居ないみたいだ…
やっぱり僕の勘違い…？

今居ないのはアイツらか…
戻って来たら少し話を聞いてみよう。

違和感（後書き）

不二に気付くのを桃にしたのは一番の曲者ということで先輩のことに気付かせようという理由と、あまり考えそうにないという理由です f ^ | ^ ;

次回、この謎を説明したいと思います（、、ゞ

読んで下さっている皆様、ありがとうございました（o ^ ^ o）

再会2（前書き）

前回居なかった二人のうち一人出てきます。

再会2

ちさとはケーキを取りに行く時、前に作ったマドレーヌがあることをふと思い出し、由美子に伝え、一度家に帰ろうとしていた。

ガチャッ

ち（わあさむっ…）

トン

ちさとが自分の家の前に来た時誰かに肩を掴まれた。

ちさとはびっくりして振り返った。

？「由美子さんが君は外だと聞いてね…久しぶりだね……………ちさと。」

ち「あっ……………」

？「……………忘れたか…？」

ち「……………久しぶりだね……………」

貞治くん……………」

乾「元気そうで安心したよ。」

ち「貞治くんもね。」

乾「ちさとがアイツらのことを考えている確率85%……。」

ち「……………貞治くんは全てお見通しか……。」

ちさとは少し困ったように微笑んだ。

乾「3学期から俺達もS高に行くことになったからよろしく。」

ち「そうなんだ！目立つね……（苦笑）周助達だけでも目立ってるのに（苦笑）」

乾「…慣れてるからな。」

ち「いいの？みんなと久しぶりに会ったんでしょ？」

不二家を見ながら言う。

乾「ちょっと話したくなっただんでね。」

ちさとは乾が居ることに気付いていたが忘れられていると思っていた為、声をかけられた時は驚いた。

乾「アイツらも戻って来たらしい。どこへ通うかはわからないが関東には居るそうだよ。」

ち「…そっか……………あのさ……………」

乾「アイツらは元気だ。前に連絡をとった。」

ちさとが聞く前に乾がそう言つとちさとはほっとしたように微笑んだ。

ち「ありがとう……………！」

乾「落ち着いてから会つたらどうだ？」

ち「その時は連絡してね？」

乾「もちろんだよ。アイツも会いたがっていた。」

ち「覚えててくれてるんだね……………よかった……………」

乾「……………それと…聞きたいことがあるんだ。聞いてもいいかな？」

ち「なに？」

乾「今は……………」

誰と生活してるんだ？」

再会2（後書き）

またまた謎ですみません（<|>）っつ

昨日新テニを見ようとしたらやっていませんでした（T T）

調べてみると大阪ではテレビ大阪で7日の2時過ぎからということ
で…お預けをくらってしまいましたp（、、q）

まあよく言えばお楽しみが延びただけなんですけどねf^| ^h；

なにはともあれ次回もお楽しみに（、、）ノ

写真（前書き）

今回は居なかった二人のうちの一人 *side* です。

まあそのうちわかります。

写真

俺はトイレから出た時にちさとさんが不二先輩のお姉さんと何か話した後に外に出たのを見た。
俺が気にすることじゃないと思ってリビングに戻るうとした時だった。

ガチャッ

戻って来たのか……？

……乾先輩……？

俺は気になり気付かれないようにそっと外へ出た。

『久しぶりだね……貞治くん』

……え？

『アイツらのことを考えている確率……』

アイツら……？

『貞治くんには……』

『アイツらも戻って来たらしい。どこへ通うかはわからないが関東

には……………」

戻って……………俺らと同じってこと？

『落ち着いてから……………」』

『アイツらは元気だ。前に連絡をとった。』

『ありがとう……………！』

『……………聞きたいことがあるんだ。聞いてもいいかな？』

『なに？』

『今は……………』

『誰と生活してるんだ？』

は……………？

家族じゃないの……………？

俺は乾先輩が言ってる意味が全くわからなかった。

……………あれ？

何これ……………？

俺は足元に落ちていた紙を拾った。

……写真？

裏には

『 ちさと6才

ちひろ6才

貞治7才

蓮二7才

精市6才

』

と書かれていた。

表を見るとそこにはまだ幼い女の子2人に男の子が3人。

仲良く笑いながら並んでいた。

よく見るとそこはテニスコートでみんな子供用の短いラケットを握っている。

これって……

……乾先輩……？

残りは……もしかして……

それにこれって……！？

俺はそれを見てもいいものかわからなくてまた足元に戻し、リビングに戻った。

リビングに入った途端英二先輩に抱きつかれた。

菊「おっチビ〜！どこ行ってたの？」

越「…トイレッズ…」

… 苦しい……………

越「… 苦しいッス… 英二先輩……………」

なんだか昔に戻ったみたいで嬉しかった。

でもそんなこと言ったら調子に乗るから言っちゃんない……………

写真（後書き）

読んで下さっている皆様、ありがとうございます（〇〇 〇〇）

正解はリョーマでした（〇〇 〇〇）

益々増えていくヒロインの謎：大体の設定は決まっているのでそれに沿って書いていくつもりなので応援よろしくお願いします！
感想等いただけると嬉しいです！

次回もお楽しみに（〇〇 〇〇）

宝物（前書き）

今回は周助sideです。

周助の私情入りまくりです……はい………笑

宝物

ガチャッ

しばらくしてちさとと乾が帰って来た。

何か仲良さげに話しながら…

いつの間に仲良くなったの？

さっき会ったばかりじゃない…何話してるんだろっ…？

『見つかってよかったな。』

『本当に！』

『いつも持ってるのか？』

『恥ずかしいけど…私の宝物だから…いつも肌身離さず持ってるんだ……！』

『そうか……』

ちさとの宝物…か…

なんだか妬けるな…

物にまで嫉妬しちゃう僕は可笑しいのかな？

ち「ケーキ持って来たよ！」

「「おお〜！」「」

ち「あとね、マドレーヌ又焼いたんだ！よかったらみんなで食べて！」

「「ありがとうございます（ぎゅいませ）」」

周「じゃあちよつと僕は裕太を呼びに行つて来るよ。」

僕は裕太を呼ぶ為に2階へ上がった。

コンコンッ

裕「はい。」

周「裕太、今からケーキ食べるからおいでよ。」

裕「おう！行く行く！」

裕太の喜ぶ顔が目には浮かぶな……………

周「クスッ……………」

裕「何笑つてんだよ兄貴……………気持ち悪いなあ……………」

周「いや……………嬉しそうだなと思つて……………クスッ……………あつちさとがマドレーヌも持つて来てくれたからね」

ああ……………なんて面白いんだろう……………

裕太さつきから百面相……………

嬉しそうだったり訝しげだったりの次は目を輝かせて……………笑

ガチャッ

ち「あつ周助、おかえり！裕太くんも来てくれた？」

周「ああ、ほら。」

裕太の腕を引つ張り僕の横に出す。

ち「よかった。私なんかがお邪魔してるし…来てくれないかと思っ
たよ。」

ちさとは少し寂しそうに笑いながら言った。

ねえ、なんでそんな顔するの……？

裕「……っ

そ…そんなことないツスよ！ただちよつと疲れて部屋で寝てただけ
ですから……ちさとさんが嫌とかそんなんじゃないっ……」

そう言う裕太は顔を赤くして誤解を解こうとしていた。

クスツ…裕太、僕はわかってるよ…裕太が降りて来なかった訳。ち
さとに会うのが恥ずかしかったんだよね。

こんな裕太見るの初めてだな。

周「クスクスツ…裕太何焦ってるの？笑」

裕「べ…別に焦ってねえよ！」

ち「ふふふっ」

周裕「？」

ち「仲良いね。羨ましい。」

周「ちさとは一人っ子？そつえばちさとの家族に会ったことないね。」

ち「んー…二人っ子……………」？

……………？

周「？二人っ子？何それ？」

ち「あはは…なんだろねえ（笑）…………一人っ子だよ。」

ちさとは笑いながらそう言った。

でもなんだかその笑顔が切なくて…寂しくて…苦しそうだった。

宝物（後書き）

読んで下さってありがとうございます（o^ ^o）

早くイブを終えたい……………笑

クリスマスも終えて早く学校に行かせたいです…f^ | ^;

すみません（< | >）

頑張ります（、、、ゞ

覗き見（前書き）

今回は第三者？です。

？は女子です。

覗き見

「じゃあまた学校で（な）」

パーティーも終え、それぞれ家に帰って行った。

ちさとと不二は手を振って皆を見送っていた。

周「あれ？英二は？」

ち「ああ、英二くんならさっきつまみ食いしてたよ（苦笑）」

周「……………そう」

不二はそれを聞いて納得していた。

ち「じゃあ私もそろそろ帰ろうかな。」

ちさとが帰ろうとした時だった。

由「ちさとちゃん！今日泊まってくでしょ？」

ち「……………え？」

周「そうだね！どうせ明日も来るなら泊まって行ったらいいんじゃない？」

ち「え？でも家そこだし……………」

由「はいはい！そうと決まれば外は寒いでしょ？入った入った！」

ちさとはされるがままに二人に中へ入れられた。

?side

私は友達と道を歩いていて。
するとある光景を見付けた。

「ねえ、あれってさ……」

「本当だ！……なんでアイツと一緒に居るわけ？」

「どうする？今は本人居るし行っちゃまずいよね？」

「どうしよ……あっちょっと！お姉さん（？）出てきた！」

『ちさとちゃん！今日泊まってくでしよ？』

……は？

泊まるって不二くんちに？

冗談でしょ？

付き合ってる……の……？

まさか………！

『そつだね！どうせ明日も来るなら泊まって行ったらいいんじゃないっ。』

『でも家そこだし……』

そうだよ！

帰りなさいよ！

『はいはい！そうと決めれば外は寒いでしょ？入った入った！』

なんかお姉さんと仲良さげ……

なんでアイツなのよ………！

……私は……認めない………！

「私は認めない………！」

私が思っていることを友達がそのまま言った。

「私だってそうよ！今行くことはできないから………学校で………いい？始業式の後に呼び出すわよ！」

「ええ！」

覗き見(後書き)

読んで下さってありがとうございます(〇> ^ 〇)

寝坊

クリスマス

由「おはよー周助、相変わらずいつも早いわね。」

周「おはよう。まだちさとと英二起きてないの？」

由「まだよ。でもいつもちさとちゃんこのぐらいに起きてるみたいよっ。」

周「なんで知ってるの？」

ちさとが泊まるのは初めてだった為何故知っているのか不思議だった。

由「いつもちさとちゃんの部屋のカーテンがこのぐらいの時間に開かれてるし、玄関先の掃除してるわよ。」

周「そうなんだ、ならもうすぐ起きるかな……………起こしてくる。」

周助は楽しそうに、そして何か企んでいるような笑みでちさとが寝ている部屋へ向かった。

由「……………イキイキしてるわ…………… 笑」

コンコンッ

「……………」

ガチャッ

ドアを開けるとそこには規則正しく寝息をたてるちさとがいた。
周助はそっと近付いた。

周「ふう〜……………よしっ……………」

周助は顔を枕元に近付けた。

周「ちさと、起きて。」

ち「んう〜……………せ…ちや……………」

周「(せ…ちや？)(ちさと、朝だよ。」

周助がそっと囁くとちさととは静かに目を開けた。

ち「れ…く……………」

周(れ…く……………?)

ガバッ

ち「…蓮くん!?!」

周助が不思議に思っているうちさとが起き上がり、周助をまじまじと見つめる。

周「えっ…と…ちさと…？」

まだ周助を不思議そうに見るちさとに周助は声をかけた。するとちさととは慌てたように声を発した。

ち「し…周助っ…ごめん寝ぼけてて…め…眼鏡とってこない？」

タン、タンと辺りを手探りで眼鏡を探すちさと。

周「これ？」

周助は近くにあつた眼鏡を取ってちさとに渡した。

ち「ありがとう。ごめん、寝坊しちゃったね」

ちさととは時計を見ながら言った。

周「寝坊…？ってまだ6時だよ？」

つられて時計を見て驚く。

今の時刻5時50分。

どう考えても寝坊という時間ではない。

周「いつも何時に起きてるの？」

ち「5時30分だけど。」

周「えっそんなに早く起きて何するの!？」

ち「朝ご飯作って玄関先の掃除して、バイト。」

周「……ご飯いつもちさとが作ってるの？」

ち「……………まあね。」

周助は少しの間が気になったが気にしないことにした。

その後、二人で菊丸を叩き起こし、ブーブー言っている菊丸を連れて家を出た。

想い(前書き)

周助sideです。

想い

僕はずっと今朝ちさとが寝惚けて言ったことが気になっていた。

『せ…ちや……』

『れ…く……』

そして僕を見て驚いたように言った名前…

『蓮くん!?!』

れんくんって誰だろう?

また僕の知らないちさとを見た。

もっと知りたいんだ。

昨日からちさとのことを知らない自分に気付かされてばかりだった。

今日三人で出かけた時も心ここにあらずだったと思う。

これからいろいろ見せてくれるだろうか…

自分から聞くことのできない自分に腹が立つ…

ああ……僕はこんなにも勇気のない人間だったなんて……初めて知ったよ………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1735x/>

転校生は.....！？

2012年1月6日17時49分発行